〈社会経済思想史研究の現状〉

[1)]小林昇経済学史学の根底にあるもの

田　中　秀　夫

Ⅰ

戦後日本の金字塔

戦後日本において燦然と輝く社会科学の金字塔としては，社会科学者なら丸山真男の政治思想史研究，宇野理論や大塚史学を挙げるのが通例であろうが，しかし内田義彦の経済思想史，水田洋の社会思想史などもあれば，広松渉の業績や渓内謙のソヴィエト・ロシア研究，野沢協のピエール・ベール研究もある。そして小林昇（1919–2010）の経済学史研究もその一つである。若い経済学史家がそのような認識を持っているかどうか定かではないが，小林昇の経済学史研究は21世紀にも参照されるべき不滅の業績であると思われる。

もとより小林昇以外にも優れた業績をもつ多数の経済学史家がいる。そのなかで杉原四郎，杉山忠平，平田清明，菱山泉，田中真晴などはすでに亡くなった。田中正司，津田内匠，田中敏弘，根岸隆，塩野谷祐一，永井義雄などは今なお健在である。しかし，経済学史・経済思想史に限れば，小林昇の業績は群を抜いている。本格的な経済学史著作集[2)]が出ているのは小林昇だけで，今後も出るかどうか疑わしい。森嶋通夫や青山秀夫にも著作集はあるが，経済学史に限定したものではないことは言うまでもない。

経済学史とは何か

経済学史という学問は経済史と経済理論の中間にある専門分野として発展してきた。その起源はマルクスの『剰余価値学説史』に遡るであろうが，大学の講座あるいは講義科目として経済学部に経済学史が置かれたのはごく新しい。我が国では戦後になって置かれた場合が多く，したがってせいぜい60年あまりの歴史しかない。英米での経済学史の著作としては，エリック・ロールやシュンペーター，マーク・ブローグなどが有名である。

我が国の経済学史学会が700人を擁する規模であって，多くの大学の経済学部で経済学史の講義が行われているということは，世界に例を見ない独自性であると言われて久しい。最近は経済学史学会の会員数も減少傾向にあり，大学

1）本稿は，2011年の夏の経済学史学会関西部会（2011年7月23日，龍谷大学）でのシンポジウム「小林昇先生の遺産から何を学ぶか」の報告「小林昇先生の学史研究の根底にあるもの―イギリスを中心にして」に少し修正を加えたものである。標題も修正した。他の報告は原田哲史「小林昇先生のリスト研究と現代の視点，そしてこれから」，および米田昇平「小林昇先生の経済学史研究とフランス経済学史」であり，筆者は冒頭の問題提起を行ったのち，二報告の後に報告をした。なお，このシンポジウムの後に，竹本洋・服部正治編『回想　小林昇』（日本経済評論社，2011年12月），および『立教経済学研究　特集・小林昇経済学史をいかに受け継ぐのか』（2011年10月）が出ている。本来ならそれらを参照して，また『小林昇経済学史著作集』なども紐解いて，本稿に加筆修正を加えるべきであるが，今回は諸般の事情で断念した。

2）小規模ながら渡辺輝雄や高橋誠一郎の学史著作集も出ている。

の経済学史講義は専任を置かずに行っているところもある模様であるが，歴史研究としての経済学史研究が海外と比べてきわめて盛んに行われているという事実には変化はない。

それはなぜであろうか。経済学史という学問は何なのであろうか。経済学史は経済学の歴史を研究する学問であるから，歴史研究である。なぜ経済学が生まれたのか，それはどのような発展ないし変化を遂げてきたのか，その理由はなにか，そして現在の経済学はどのような状況になっているのか，歴史的視点から見て，現在の経済学はいかにあるべきであるか，等々といったことを明らかにすることが経済学史の主題となるであろう。

そうしたことを知ることは，もちろん有意義である。現代経済学の直面している課題を考えるときに歴史的視点ぬきでは覚束ないであろうし，経済学史の知見は有益な情報を提供するであろう。さらに経済史の知識も必要である。社会，国民，世界の経済がどのような変遷を遂げてきたかという事実認識との関連なしには経済学史も現在の経済学も意味のある学問とはならないであろう。

そのようなことを経済学史自体が示唆するし，とりわけ小林昇経済学史が教えることは多い。それでは小林昇経済学史研究の特徴と意義について少し立ち入って考えてみよう。

小林学史の方法と射程

小林経済学史の方法は定評がある。それは経済史を踏まえた原典の実証的な文脈主義的分析と言ってよい。しかし，中心に置かれているのは，古典的文献であることは言うまでもない。マルクスの経済理論，ケインズの経済理論が理論的分析の参照軸として前提されている。そこから始まる小林の学史研究は，文脈主義的研究である。

文脈主義的学史研究は古典の周辺に埋もれている文献の発掘につながる。二次文献も重要なものは参照可能な限り参照し，幅広く研究するというのが小林昇の姿勢である。優れた二次文献は新たに究明すべき文献や文脈，対象を教える。その結果，研究の射程は広がり，深化する。しかし，研究は無限には行なえないから限定が必要となる。一般的に言えば，限定は，結局のところ，時間と能力によって設定されることになるとも言えるが，小林の場合は，リスト，イギリス重商主義，スミスが限定された対象である。

周知のように，小林昇経済学史研究においては，経済史が参照され前提されているが，基本的に政治思想や社会思想，イデオロギーなどの関連領域は省略されている。この点，タッカー研究だけは例外である。したがって，広い近代社会思想のなかで経済思想を考えるという射程はとらない。また思想史の伝統と近代という比較はないから，基本的に近代批判は登場しない[3)]。

小林学史の対象

小林の学史研究が上述のようなデルタを形成していることは周知の通りである。W･ペティーあたりから始まり，ステュアートを頂点とするイギリス重商主義，リストを中心とするドイツの保護主義，そしてスミスの自由主義経済学からなるこのデルタは偶然に形成されたのであろうか。否，そうではない。

3）このように言うと反論も予想されるが，国民経済を形成する近代が支持されているのは明らかである。社会の底辺まで富裕（民富）が行き渡り，農工商のバランスが取れた国民国家は戦時経済を経験した小林昇さんの支持するモデルあるいは理想であった。しかし，近代は多くの国で歪んだ国民経済しか形成できなったから，その意味では近代が無批判に支持されているわけではないことは言うまでもない。

まず，このように17世紀から19世紀にかけての英国とドイツの経済学が小林さんの対象であったことを確認しておこう。すなわち，小林経済学史の中心にあるのはリカード，ミル，マルクス，マーシャル，ケインズではないのである。18世紀が中心にあると言えるかもしれないが，ケネーやフィジオクラートのフランスは射程外で，イタリアもアメリカも関心の外部である。では果たして18世紀のステュアートやスミスが中心にあるのだろうか，それとも19世紀の中葉のリストが中心に置かれているのだろうか。それを見極めるのは容易ではない。少なくとも一見する限り，リストからイギリス重商主義とステュアート，タッカー，そして次にスミスへと小林昇の研究の力点は移動し，最後にステュアートに再度研究の焦点が置かれたように見えるからである。そして小林昇は自らの研究を三極からなるデルタの開拓として語った。したがって，小林昇の意識においても三極は等価値であるように見える。しかし，本当にそうなのであろうか。私の理解は後に述べよう。

小林学史の根底にあるもの　そのアクチュアリティー

しかし，このように小林経済学史の対象がかなり遠い時代のイギリス（正しくはブリテンというべきかもしれないが，小林さんはスコットランドも含めてイギリスと述べている）とドイツのかなり過去の経済学者であるからといって，小林経済学史はノスタルジーの産物ではない。きわめてアクチュアルな問題関心に支えられていたように思われる。すなわち，その認識の核心にあるのは，戦後日本の課題は17，18世紀のブリテン，19世紀のドイツが直面していた課題と段階的な共通性があるという把握である。それは敢えて言えば，健全な国民経済の形成――農工商の均衡ある発展を実現した国民経済，リストの言う正常国民の実現――という課題である。その認識の具体化がトリアーデの研究となった。

したがって，小林さんは経済史をもよく研究された。その経済史の知識は比較を通じた社会の段階把握に迫る手段となった。18世紀のイギリスと20世紀の後半の日本を比較するということが，明示的に行われているわけではない。しかし，両者の段階的差異は常に意識されていたにちがいないのである。この点には講座派から大塚史学に継承される歴史主義の影響を見ることができるかもしれない。あるいは，それはマルクスを出発点として洗練された歴史主義であったと言うべきかもしれない。

小林が取り組んだトリアーデは戦後日本の文脈，もっと広く言えば，日本資本主義論争に始まる日本資本主義理解の文脈，さらには戦中・戦後世界の文脈と不可分の関係にあった。ウェーバーが明確にしたことでもあるが，社会科学の場合，研究者は自らの時代経験と社会認識，問題意識をもって研究対象を選ぶことは言うまでもないであろう。もちろん，研究者自身も自らの置かれた時代や境遇などの制約を受けているから，研究対象を自由に選べるわけではない。

Ⅱ

兵卒＝庶民の目線

第二次大戦に徴兵され，兵卒として越南（ベトナム）へ出征した小林さんは，自らの時代経験（ハンナ・アレント）のなかから，庶民の目線で，戦後の日本社会のあるべき姿を追い求めるという課題を胸に，経済学史というフィールドでその課題に迫る武器を磨いた。

兵卒としてなぜ自分は越南に送られ，生死の狭間をさまよわねばならなかったのか。戦場とは何であり，自分がコミットさせられた戦争はどのような戦争なのか。そこに大義はあるのか。

残酷な事実だが，大義などなかった。他界した戦友の死はどう考えればよいのか。

庶民の目線でと述べたが，それは小林さんが知識人の傲慢，うぬぼれに潔癖なまでに批判的であったからである。エリートの傲慢が鼻持ちならぬ頽廃や酷い災害を招くことがあるというのは，小林さんの痛烈な認識である。小林さんは，それを東大経済学部の内紛，また軍医総監森鴎外の事例などを挙げて語っている。福島原発事故でこの国のエリートたちが相変わらず無責任で頽廃していることを国民は見せつけられてきた。

研究の出発点

今から30以上前のことであるが，小林先生になぜリストや重商主義から研究を始められたのか質問した事があった。その時先生は東大経済の指導教授であった本位田祥男先生からヘクシャーの『重商主義』を読むように指導されたからだと答えられたが，それは私の理解では表面的な理由である。小林さんは「特定の師に仕えなかった」（『経済学史春秋』145）と語っているが，リストや重商主義を研究することが重要と判断されていたからに違いないのである。

戦中の日本は帝国主義・軍国主義の時代にあった。明治政府が富国強兵を国家目標にすえたことも影響したが，帝国主義の覇権争いに日本も否応なしに巻き込まれた。しかし，欧米のように，日本は資本主義の高度化としての帝国主義国であったのではなく，ヨーロッパの歴史との対比で言えば，「半封建的半軍事的帝国」であり，日本は未だ基本的に「重商主義」の時代の課題を解決していなかった。小林さんはその時代状況から超越して生きることはできなかった。小林さんは，一部の共産主義者やキリスト教徒のように意図的に国家や時流に抵抗をしたわけでもなかったが，軍国主義に賛同したわけでもなかった。小林さんは青年兵卒として従軍したが，それは普通の選択であった。

帝国と帝国主義

もとより帝国主義―軍国主義時代の日本といえども戦争一色ではなかった。銃後にはいくらか自由な生活もあった。それは18世紀のイギリスとて同じ事である。イギリスは世紀の大半，戦争をしていたが，国内は概ね平穏であった。ただし，論争と党争は激しくたたかわされた。争点は多々あった。イギリスはオランダ等とプロテスタント国家連合を形成し，ブルボン家のフランスに対抗した。プロテスタント連合はダンテに遡るカトリックの普遍王国の野望に警戒心を解けなかった。また戦争を敢行するには国内での危機意識を醸成させる必要もあった。

わが国の場合もそうで，帝国主義の時代状況の中で，時の指導者たちは，自らを帝国として強化し，欧米列強の侵略を撥ねつける力を身につけねばならないと考えた。アヘン戦争で蝕まれた上海租界などの植民地は欧米に対する警戒心をかきたてる理由となった。実際に英国もフランスもアメリカも，アジアを植民地化し，その勢力圏を拡大しつつあった。

小国日本の自律

小国日本はいかにすれば国を保全できるか。現状に甘んじて手を拱いていて存続が可能か。国家理性（マキァヴェッリ）は生存のためにライオンの力と狐の狡知を使い分けるように奨励していた。16世紀以後のヨーロッパにあっては，共和国は存続できる規模になるまで拡大を求めなければならなかった。安定は夢であった。ヨーロッパが拡大した現代にあっては，近代の論理――拡大する共和国――に従って小国日本は生命線を東アジアに求めることになった。多くの人には，それが帝国主義時代の宿命であると思われた。

近代の論理を小林昇はどうコントロールしようとしたのか。近代は欲望の解放を可能にし，庶民も豊かな生活をおくれる社会を生み出したが，資本主義は生存競争を激化させもした。近代国家は国家存続のために戦争に訴えた。国家を廃止することはできない。帝国主義を抑制した社会はいかに可能か。社会主義はどうか。飢えた大衆を生み出さないためにはどうすればよいか。国民が飢えず，また戦争に訴えずに，生存することが可能な条件は何か。工業の順調な発展による農業の近代化が必要条件ではないか。しかし，欲望の解放には限度がなければならない。経済学史に議論を限定していたが，こうした問題とともに近代のポジとネガを小林が透徹して認識していたことは間違いない。

わが国の資本主義は，幼弱な産業資本（生産）を育成しなければならないという要請に直面しつつ，重商主義的要素を残しながら，同時に帝国主義時代の「野心」としての領土支配と「恐怖心」としての高度国防思想に結びついて展開していた。

帝国日本は，さらには五族協和（日，満，漢，蒙，鮮），東亜共同体の構築（京都学派）という理念によって膨張の論理を美化しながら対外侵略に打って出た。こうして敢行された冒険主義的な対外進出は，日韓併合（1910年），満州国建国（1932年）までは成功したかに見えたが，現地の独裁政治よりましな場合＝例外はあるにしても，そもそも対外侵略が異なる文化と歴史をもつ他国の歓迎を受けるはずもなく，現地の激しい命賭けの抵抗にあい，やがて圧倒的に強力な米軍によって，日本軍は完全に叩きのめされる。

国民国家が帝国になることはそもそも多大の犠牲を内外にもたらす。帝国への道は苦難の道であった。それは日本のみならずイギリスもアメリカもソ連も同じであった。

戦後を迎えた小林さんにとって，重商主義は「力」による支配の拡大を求める帝国主義とともに未だ現実を形成する要因であり，克服すべき政策体系であった。保護を名目にする力による支配としては重商主義も帝国主義も異ならないのではないか。

重商主義のポジとネガ

しかし，そうだとしても，重商主義のすべてを否定できるかという問題があった。すべてを赤か黒かと識別できるであろうか。複雑な社会現象に単純な規定を与えることは間違いの元である。重商主義をどう分析すべきなのか。小林さんの最初の課題が生まれた。

トーリー・フリー・トレーダーの一人，トマス・マンの『貿易によるイングランドの財宝』のような重商主義文献は，貿易＝商業，貿易差額（Balance of trade）による富裕の実現を標榜した。重商主義が平和な商業活動を意味する限り，相互の利益に（互恵・正義），また戦争（脅迫）ではなく友好関係の形成に繋がる。

しかし，貿易＝商業が国家に支援され，特権的政策によって遂行されるとなれば，正義はそこなわれる。トマス・マンの主張の意図が特権的な東インド会社の利益を擁護することにあったことはよく知られている。貿易差額説は，特権の維持，自国の優位を戦略として目指すものである以上，国家権力の発動を介して戦争を呼びこむ危険な思想であった。

商業が大衆的な富裕を実現する場合と，特権的大商人（資本家）だけが富裕になる場合がある。商業が国内の産業の育成をもたらす場合もあれば，たんなる中継貿易の場合もある。多くの人手を雇うか否かも重要である。多くの雇用があれば，多くの民衆が生活でき，民衆は好き好んで暴動に訴える必要がなくなる。治安が維持できる。政府は治安の維持を役割とするから（Salus populi suprema lex esto），雇用に無関心ではあり得ない。

前期的資本の概念

このような重商主義時代の政策分析を通じて，重商主義の概念の吟味が行なわれた。前期的資本の概念が大塚史学から継承されることになる。

経済学者が個別資本や特定産業の利益を擁護することは不正であり腐敗である。公正な研究はまずは国民の幸福をどう実現するかという問題に答えるものでなければならない。戦中・戦後の社会科学者の課題はここにあった。国民ではなく，人民の幸福を標榜する立場もありえた。市民社会の実現を目標に掲げる場合もあった。資本主義社会を否定し，社会主義社会や共産主義社会を求める人も多かった。

カントがそうであるように，理念としては世界共和国を選ぶのが崇高で正しいかもしれぬ。しかし，それは夢想であり，ユートピアである。現実主義に立って世界を分析すれば，日本の場合，国民国家，国民経済という単位を選ぶしかない。遠い将来はともかく，さしあたりは国民経済を望ましいものにするにはどうすればよいかを考えるのが，経済学者の役割であるというのが，小林さんの根底にあった思想である。

国民経済は実体として存在しないという世界資本主義論もあるが，国籍があり，国家機構があり，国の伝統や文化があることは否めないし，我々は一足飛びに世界市民として暮らせないことも明らかである。一部の特権的個人は国も住所も選べるが，庶民にはそれは許されない。だからといって，国，国民，国民経済を絶対化すべきだというわけではない。

国民経済の概念

戦後日本の課題として小林さんが見据えていたのは「国民経済」の形成である。あるいは「民富」の形成である。農工商の均衡ある発展と言い換えてもよい。庶民の目線と述べたが，生活者の視点と述べてもよい。上からの為政者の視点を持たなかったというのではない。政策論を展開するとき，両者の視点を持ちながら，しかし対象は生活者の生活をいかに保全するかということに置かれた。小林さんの原点にある問題は，国民の平和で安全な生活は何によって確保されるのか。人間は歴史を通じていかに生きて来たのか。経験を踏まえて考えるとき，戦後の日本はどのような社会を目指すべきなのかであった。農工商のバランスのある発展はリストが目指したものであるが，小林さんの課題でもあった。

Ⅲ

体制選択問題

多くの戦後派が意識したのは社会主義か資本主義かという体制選択問題あったが，小林さんの基本問題はそのような体制選択問題ではなかった。体制を問うなら，国民＝市民の生活を良くするという観点から問題にすべきである。マルクス主義者は，諸悪の根源を私有財産に求め，資本主義の廃止，貨幣の廃止，国家の廃止（できればいいね――『西洋から西欧へ』）を主張していた。しかし，マルクスに源泉があるこうした主張に現実性があるとは小林昇はおよそ考えなかった。小林昇にとって戦争体験の意味は大きい。世界平和とか世界共和国は小林さんには夢想であった。（『西欧へ』では空想を語っている。国家なき世界，社会主義，マイナス・成長など。しかし，自身の本音は学問的労作に示されていると言う）

人間は国民のなかに生まれ落ちる。良かれあしかれ，個人は国民のなかで，国家に護られながら生きる他にない。国家は人権を蹂躙し，個人の勤労の成果である私有財産を奪うこともあるから，国家を全面肯定できるわけではない。しかし無謬ではない国家は善ではないにしても

必要悪である。国家と国防軍がなければ，国や社会は外敵に簡単に侵略され征服されるであろう。しかしまた国家によって兵卒は加害者にさせられる。国家は領土をめぐって争い，戦争も行なうけれども，国際関係が法のみによって規制されること（それは理想ではある）はまず不可能である。国家は武力を持たねば安全保障など覚束ない。

リアリズム

世界と歴史のリアルな認識は小林さんのものであった。誤解を恐れずに言えば，その意味でマキァヴェッリに通じるリアリズムが小林さんの政治観である。そうした認識に立つとき，マキァヴェリズムの落とし子としてのイギリス重商主義とリストの保護主義が小林さんの最初の研究対象となった意味を理解できるようになる。

リアリズムの対極はアイデアリズムである。観念論とも理想主義とも訳す。ロマン主義もある種のアイデアリズムである。社会主義もまたアイデアリズムになりがちである。

理想と理想主義とは違う。小林さんにも理想はあったであろう。しかし，理想と現実の途方もない距離に自覚的であること，それは小林さんの場合，際立っている。小林さんはその論説で理想を語ることはなかった。

イギリス重商主義の課題は，大国フランスに対抗しての，国民経済の形成にあった。リストの課題はイギリス帝国に対抗してのドイツの国民経済の形成にあった。個別的な政策論を貫いて小林さんが見ていたのは根底における国民経済の形成であった。

自らが生を受けた国，郷里に根ざして人は成長する。そうした文化を暴力的に奪う過激な政治を小林さんは否定した。社会が良くなることを否定したのではない。文化を可能とするしっかりした国民経済がないと安定した国民＝市民の生活は実現しない。

固有の重商主義　単純な段階論の否定

普通，重商主義は商業資本のための政策であると理解されている。国民産業と標榜されたとしても特権的大商人が最大の受益者であるという理解である。東インド会社などがその典型である。宇野弘蔵はレーニンとヒルファディングを踏まえて資本主義の段階論を商業資本，産業資本，金融資本として区分した。このような区分は小林昇の採るものではなかった。宇野によれば，現代は金融資本段階であるけれども，小林はそのような分類に満足しなかった。

重商主義が商人資本の政策体系に過ぎないとすれば，重商主義は国民経済と直接の関係はない。重商主義が，世界経済，世界資本主義ではなく国民経済と緊密に結びつくためには，国内での雇用や民富の形成と相関性がなければならない。歴史研究は重商主義時代の現実の多面性を明らかにしている。こうして重商主義一般，歴史とともに古いG—G’としての重商主義ではなく，国民経済の形成を推進する「固有の重商主義」という概念が必要となった。後者は国民経済の形成を目指した政策体系として定義し直されたのである。

戦後直後の日本にとって，体系的な国民経済の再建策が必要であった。アメリカ占領軍が行なったことは封建遺制の一掃（天皇制は温存された）であり民主化であったが，財閥解体を受けて，戦後日本は産業民主制に基づく産業資本をいかにして形成するかという課題に直面していた。政府は傾斜生産方式を導入し，上からの産業化を主導した。産業は工業（当時としては重化学工業）でなければならなかった。為替レートの固定は重商主義の保護関税の役割を果たした。ステュアートに集大成されるイギリス重商主義と保護主義者リストの問題は，戦後日本の課題と見事に重なったのである。

固有の重商主義とは要するに国民経済の形成を目指した体系的な人為的介入策であった。

高度成長の帰結

経済の高度成長は豊かな社会を生み出した。国民は飢餓から解放された。世界市場で競争力を持つようになった日本の中核産業にとって，もはや保護主義は不要である。国際競争力のない農業をどうするかは，論争のつきないイッシューとなった。これはモラル・エコノミー問題であった。穀物＝食糧は生命維持に直結する商品として独自性を持っており，保護が必要であるという見解を日本政府は堅持してきたが，小林さんはそれを暗黙裡に支持していたのではないかと思う。その問題は弟子の服部正治が「穀物法廃止の前提」という問題設定において間接的に追求した。

スミス研究への投入

高度成長の恩恵が世に行きわたった時に，小林さんがスミス研究に力点を移し，スミスの「豊かな社会」の分析，構築論に目を配ったのは，自然であったように見える。しかし，自由主義礼賛は小林さんの主張ではなかった。またスミス自由主義への関心が俄かに生まれたというわけでもない。今や，日本は高度成長後の豊かな社会にあって，自然破壊やエネルギー枯渇などの新しい問題に直面していた。小林さんの目が生産力の破綻という問題に向けられた点は新しかった。生産力説批判という文脈では，スミスはステュアートを乗り越えたのだが，そのスミス自由主義そのものを乗り越えなければならないというのが，70年代の小林さんであった。

それは「新しい保護主義」であろう。環境や自然を保護しながら，慎ましい生活を目指すというものであったように思う。

学問的禁欲ということ

小林さんはマルクス，ケインズ，リスト，ステュアート，スミスを読んで概念を鍛え，二次文献も豊富に参照しながら，マン，ダヴナント，ハリス，ヴァンダリント，タッカー，ステュアートなど経済学史上の多くの人物の読まれないパンフレット等を掘り起こし，前人未到の専門的な仕事をされてきた。小林経済学史は経済学者としての小林さんの一種禁欲的な世界である。

Ⅳ

現代の課題：国民的利益と国際協調

それでは小林さんが学史研究を通じて訴えた課題はすでに実現したのだろうか。過去のものとなったのであろうか。バランスのある国民経済の形成は実現したであろうか。民富はどうか。今日の世界経済は国民経済を乗り越えたのだろうか。将来の地球社会はどうなっていくのだろうか。農業も，工業も，商業も重要な産業である。情報と金融が中核産業に深く浸透し，形態を複雑化・多様化したが，産業の重要性は変わらない。それぞれがインフラ部門を持ちながらも，営利を通じて動いて行く限り，行きすぎ・詐欺まがいの利権漁り・利害対立は繰り返されるであろう。金融工学がグローバルな経済活動を推し進め，金融資本が犯罪的とも言うべき暴利をむさぼりつつ，世界の格差を拡大してきたことは記憶に新しい。しかし，そうした悪が無批判に許される時代ではなくなったのも事実である。国際的な公正さの合意が生まれつつある。また合意を生みださなければならない。

民富は形成された。富裕は行き渡った。近年の格差社会化で貧富の格差が広がっていることは事実であるが，福祉政策を厚くすれば対応可能である。深刻なのは国家の累積債務である。900兆の国家債務を小林さんはどう考えるのだろうか。（経済学の意味はなくなったという発言は，たんなる放言か，アンビヴァレントな心情の一面の表白か。）

国民経済はどうか。文化的伝統はどうか。国際化と国民文化は対立するのであろうか。国際化，世界経済，グローバリゼーションにもかかわらず，基本的に国民経済がある程度健全に維持されていることも確かである。これからも国民が堅実に働く限り農工商のバランスは維持されるであろう。とは言っても，食糧の自給率が低いことは事実である。農業が自由化と競争の圧力にさらされ，空洞化の波にさらされていることも事実である。あらゆる商品に海外の生産物が混入している。純国産などは今では天然記念物になりつつある。しかし，それは危機的事態なのだろうか。

ハイブリッド化は常に進む。他方で，純粋種を護る営みもなくならない。文化自体が様々な程度の純化，雑種化（異化）を繰り返して変動していく。変動には注意が必要である。人間はしばしば愚行を犯す。しかし，世界大戦はもう起こせないであろう。局地紛争はなくならないが，世界は紛争の処理にも次第に上達するであろう。様々な利害の対立がある限り，紛争は再発するし，テロも軍事行動も当分はなくならない。しかし，紛争を減らすために世界が協調・協力する時代となってきた。

世界のなかで，日本の国民経済をどうするのかという問題を考えるとき，小林経済学史は未だ示唆を与えることができる遺産である。

先端産業は世界資本主義の範囲で遷移していくであろう。金融の中心地はどうか。アムステルダムからロンドン，そしてニューヨークへと中心は移動してきた。グローバリゼーションは金融と情報の世界で凄まじい展開を見せている。もの作りもまた遷移していく。メジャーな企業は業種を問わず国際化を進めている。とすれば，国民経済は次第に空洞化あるいは解体するのか。

経済も社会も変動し，変容，変貌せざるをえない。やむを得ざる趨勢というものがある。世界の中での日本，国民的リゴリズム，独善ではなく，国際協調という視点で考えることが必要である。

日本を軸に問題を考えるとすれば，今，明確にすべきは，小林さんが追求した農工商のバランスある発展を実現した正常国民を追求すべきなのか，それとも国際化・グローバル化のなかで限りなく協調しつつ，諸外国と共存をはかって行くべきかである。選択肢のどちらを選ぶべきかである。この問いには単純には答えられないであろう。回答は両方の理念のバランスに求めるべきであろう。国民経済のバランスを追求しつつ，しかし同時に国際協調，自由貿易も目指すという二重性を堅持することである。

この二つは明らかに矛盾し，両立しがたい。しかし，それ以外に正解はない。社会は絶えざる変動の過程にある。安定が長期間続くことは例外である。変動を容認しつつ，できるだけ平和で繁栄した社会を維持することが求められている。排外主義にならず，閉鎖的にならず，開放的で，自由な社会を維持すること，そして伝統文化も継承し発展させること，しかしコスモポリタンな政治観と人間観も養成すること，こうした課題に直面しているのではないかと思われる。

小林昇の教養

小林さんの教養はどのようなものだったのだろうか。ギリシア・ローマの古典を楽しまれたのか。近代の古典はどうか。文学はどうか。近代自然法思想家や哲学者を愛読されたのか。カント，ルソー，ロック，デカルト，スピノザ，マキァヴェッリ，モンテスキューなどは小林さんの愛読書であっただろうか。TMSをよく読まれたことは疑いない。だからヒュームについて経済論以外にはあまり関心がなかったとも思えない。講座派・労農派の日本資本主義論争やウェーバーは小林さんに大きな影響をあたえたであろう。こうしたことの多くは圧倒的な経済

学史の業績によって隠されている。実は，豊饒な読書によって西洋と西欧を自分で理解しようとした人が小林昇である。カント，ヒューム，スミス，マルクス，ウェーバーなどの理解は深い。小林さんは国粋派ではなく西欧派であった。しかしながら，そのことと歌人であることは矛盾しないか。

内田義彦

マルクス・ボーイだった内田義彦や水田洋との違いは大きい。講座派との繋がりは内田義彦の場合，濃密である。山田盛太郎から大塚久雄へのラインの先に内田は立つ。小林も大塚の影響を受けているが，その継承はきわめて限定的であって，小林が継承したのは，あえて単純化すれば，前期的資本という概念と国民経済の枠組みである。水田はいっそう距離を置いている。大塚史学との関係では内田，小林，水田の順に希薄になっていく。ウェーバーのエートス概念は大塚，丸山，内田をとらえたが，小林，水田は拒否した。

内田の教養は，マルクス主義とウェーバー，そして民主主義にあった。マキァヴェッリ，ホッブズ，スミス，ルソーも内田の精神に深く入っている。戦後民主主義を舞台として活躍した戦後派知識人と交流しながら表舞台で活躍したのが内田義彦である。内田がかわいがった後輩や弟子は，平田清明，吉澤芳樹，羽鳥卓也，田添京二，住谷一彦，山崎怜，そして平田の弟子の山田悦夫，野沢敏治などである。田中真晴，平井俊彦などの京大の教授もまたその影響を受けていた。

内田にはまた市民社会（社会人）のなかに信奉者が多数いた。そうした社会人向けの文章を多数内田は書いている。内田は未来社からデビューし（上昇転化？して）岩波知識人となったが，小林は未来社から本を出し続けた。リストの翻訳だけは別であるが。内田は翻訳をしなかった。小林も，水田も多数の翻訳をしている。また小林の信奉者は圧倒的に学者である。

歌人小林昇

小林には珠玉のエッセイ集があり，こちらにはそれなりに多くの読者がある。『帰還兵の散歩』，『山からの街』などである。では夢やロマンはどうなったのか。歌人小林の世界がある。小林さんは二つの価値の世界を使い分けたように思える。情動の介入を禁じたリアルな現実認識の世界＝学問と感情・情動が解放される世界＝和歌。昭和歌壇に燦然と輝くのは歌人小林昇の『歴世』であり，しかも小林の作品で最も後世まで読まれるのは経済学史上の著作ではなく，歌集であるとの見解がある。

小林学史を継承するとはどういうことか

いずれにせよ，我々は小林昇経済学史を継承し，それを乗り越えていく学問的使命を負っている。小林昇が読んだものを検証し，読まなかったもの，読めなかったものを読み広げ，思想史のコンテクストをいっそう掘り下げ解明すること，そしてその意義についても考察を深めること，そうすることを通じて，現在の世界の課題を再検討し，現在の理解にフィードバックすること，それがリアリズムに立った理論的歴史的研究としての経済学史である。